

ASEAN諸国 日本語パートナーズ

国際交流基金アジアセンターが昨秋から始めた日本語事業「日本語パートナーズ」の第一陣としてタイに赴任した本学の卒業生・中村紀子さん(平26文)から、メッセージが届いた。この事業は、ASEAN諸国の教育機関で日本語を教える教師やその生徒のパートナーとして一定期間、日本からボランティアを派遣するもの。2020年までに約3000人の「パートナーズ」派遣が予定されている。前出の瀧澤あゆみさん(平25文)も、今年1月からインドネシアに赴任している。



「日本語キャンプ」に参加の中村さん(後列左から5人目)

中央白のコートが大阿久さん
2012年、オレゴン大学で



日本語教育は、言語とともに文化を伝えるものでもある。日本語教師として力をつけるために、日本語の専門的知識や日本語教育の技術習得に加え、幅広い実習経験は欠かせない。文学部日本語学科は、海外で日本語教育実習を行う充実した海外研修が特長のひとつだ。

文学部 日本語学科

日本語教師として幅広い視野を学ぶ

米・韓の大学で充実の研修

研修先は国際交流協定校のオレゴン大学(アメリカ)、担当Ⅱ王伸子文学部教授と、国際交流組織間協定校の湖南大学(韓国、担当Ⅱ備前徹文学部教授)。
オレゴン大学では春期休暇中に7週間、湖南大学模範授業に臨む専攻生。2014年、オレゴン大学で
卒業生に話を聞いた。学では夏期休暇中に2週間の現地研修を行う。いづれも現地の日本語学習クラスで教員の指導を受け、クラス観察、授業のシナリオである教案作り、ディスカッションを経て模範授業を行う。両研修とも国際交流基金などから助成金が出ており、学生の金銭的な負担は軽減されている。
オレゴン大学では、実習生1~2人を受け持つ日本語科目担当教員から、教壇実習に至るまで全過程の細かい指導を受ける。30時間ほどのクラス観察のあと授業作成や合同模範授業を行う。研修に参加した大学院生と
卒業生に話を聞いた。オレゴン大学で実践を学びました。日本語教育の基本を体で覚えたと思えます」と言うのは大阿久絢子さん(院文修1)。文学部2年次生の瀧澤あゆみさん(平25文)。
「学習者から答えを引き出すよう指導するなどオレゴンの先生から多くを学びました」とも。知り合ったオレゴン大学生がその後、本学に短期留学するなど交流を深めた。
瀧澤さんはオレゴン大学での研修にも参加した。湖南大学では4月から授業を
「アメリカと韓国。全く違う環境で日本語教育現場を知る良い機会となり、湖南での実習を経て今まで以上に日本語教育について興味を持つようになりました」
瀧澤さんは、日本語パートナーズ派遣事業に参加。インドネシアのジャカルタの高校で日本語教育に携わっている。
王教授は「学生たちはひと回り大きくなって戻ると、日本語教育の道に進む決心を固める学生が多いのは、海外研修が評価されているのだと思います」と話す。
本年度のオレゴン大学教育実習は現在展開中。受講生4人は3月13日まで同キャンパスで研修を続ける。

タイの高校で活躍する中村紀子さん

現在、タイのウドンタニという東北部の街に住み、現地の高校(ウドンピッターヌクーン高)で日本語の先生のサポートを行っています。発音を指導し、黒板にひらがなや漢字を書いてみせて、実際に日本語を教えることもあり、1面に写真。
タイの高校生は熱心で積極的に質問します。ポイントを教え、理解してくれるとやりがいを感じます。色画用紙で獅子舞を作り実演したり、年賀状を書いたり……。日本人だからこその文化紹介や、発音指導などを中心に、日本語指導のバックアップを行います。
学生時代から外国の文化に興味があり、中国語を学んで、よく海外を旅行しました。佐竹弘靖教授の教養ゼミで中央アジアのアルメニア、グルジアを訪ねたこともあり、タイについて紹介することもできます。まさに、私がやりたかったことでした。
しかし、実際現地に派遣されると、自分の想像を重ねていきたいと考えています。

文学部日本文学文化学科 世界の大学と結ぶネット授業

自国文化を再認識

日本文学・文化を、インターネットを使って海外の大学とリアルタイム討論……。そんなIT授業が文学部日本文学文化学科で行われている。欧米やアジアの大学と専修大学の教室を「テレビ会議」システムでつないで展開する共同授業や遠隔授業を、板坂則子教授(江戸戯作文学)が中心となって行っている。ネット授業により、学生たちは日本の文学・文化を海外の教員や学生たちがどのようにとらえているかを知り、自国を再認識する絶好の場となっている。

カナダ

昨年11月14日、カナダのプリティッシュ・コロンのピア大学のジョシュア・モストウ教授の遠隔授業は、学生70人が参加して行われた。日本時間は15時30分、現地は前日(13日)の夜22時30分。
日本古典文学が専門のモストウ教授は、百人一首の研究で知られる。授業のテーマは「絵入り本による百人一首の解釈」で、絵が入ることで解釈が変わる例を講義。和歌に絵をつけることにより多くの情報加わる姿を紹介した。
同教授には活発な質問が寄せられた。

韓国

同25日には、板坂ゼミ生45人と韓国の大田大学(大田広域市)の日本学を学ぶ学生35人(指導・関内勲教授Ⅱ平13院文博)との共同授業が行われた。共通テーマは「現代社会における古典作品」。
板坂ゼミ生が「和菓子の「黒髪」について発表。大田大学の発表は、韓国の「口伝説話と民心」「クホミ列伝」。それぞれの発表が音声動画付きのパワーポイントで行われたあと質疑応答合戦に。1時間半はあっという間に過ぎる。
発表のコンテンツ作り

ネット授業は文部科学省の補助事業に採択された。当初は通信事情が悪くトラブルもあったが、08年ごろから軌道に乗れ、現在では、情報機器操作も大学院生を含む学生たちが行っている。情報機器に強い文学部生を育てている点も特徴だ。
カナダはカルガリー大学とも行っており、相手国はほかにアメリカ(ペンシルバニア大学)、台湾(輔仁大学)、イギリス(ケンブリッジ大学)、ドイツ(フランクフルト大学)、エストニア(エストニア人文大学)など多数だ。
板坂教授は「事前準備は大変ですが、学生たちは声を出す大切さを知り、自国の文化や歴史を日本語でしっかりと説明できるようになり、ネット授業の効果



プリティッシュ・コロニア大学との遠隔授業。画面を通してモストウ教授から講義を受ける



大田大学との共同授業で質問する板坂ゼミ生

を2、3週間前から始めた板坂ゼミ生は、そのやりがいの大きさを語った。▽「自国の文化を正しく学ぶ機会を得た」(田原聡さん・文2)▽「韓国の学生は日本の文化をよく知っている。私たちはもっと勉強しなければ」(早坂恵さん・文3)▽「日本語が上手なのはびっくり。海外から見る日本文化を感じられます」(加納隆太郎さん・文2)▽「外国の先生の講義は着眼点が高く面白。ネット授業だからできるものだ」(本郷康博さん・文2)。
ネット授業は文部科学省の補助事業に採択された。当初は通信事情が悪くトラブルもあったが、08年ごろから軌道に乗れ、現在では、情報機器操作も大学院生を含む学生たちが行っている。情報機器に強い文学部生を育てている点も特徴だ。
カナダはカルガリー大学とも行っており、相手国はほかにアメリカ(ペンシルバニア大学)、台湾(輔仁大学)、イギリス(ケンブリッジ大学)、ドイツ(フランクフルト大学)、エストニア(エストニア人文大学)など多数だ。
板坂教授は「事前準備は大変ですが、学生たちは声を出す大切さを知り、自国の文化や歴史を日本語でしっかりと説明できるようになり、ネット授業の効果